

何が大切か

北海道教育大学附属旭川小学校長 伊藤 一 男

平成29年度北海道教育大学附属旭川小学校教育研究大会は、公開授業、各部会、講演会と、上川管内をはじめ、様々なところから多くの方々の御参加をいただき、盛会のうちに会を閉じることができました。大会を開催するに当たり、御指導、御支援を賜りました北海道教育庁上川教育局、旭川市教育委員会をはじめ関係諸機関の皆様、心より感謝申し上げます。また、御来賓、助言者、司会者、記録者をはじめ、御参加いただき、御指導、御支援くださった多くの方々に深く御礼申し上げます。1日日程となって2年目、昨年度よりも運営には慣れてきたかと思いますが、まだまだ工夫のしどころはあるかと思っています。

本校では、本年度より3年間にわたる研究テーマを「学びをつなぐ子供を育てる教育活動の創造」とし、1年次は「各教科等において重視する資質・能力の育成を目指す学習づくり」といたしました。次期学習指導要領が公示され、様々に対応が求められることとなりますが、目先の変化に惑わされることなく、とはいえ、それを意識しつつ、教育の根元に関わる本質的なところで研究を進めていくことができればと思います。

次期学習指導要領の目玉として「主体的・対話的で深い学び」ということが打ち出されています。しばらく前まで「アクティブ・ラーニング」という言葉が使われていました。教育現場において、今までにも様々な方策が模索されてきました。しかし、それが全ての側面で、完璧であったことはなかったように思います。それまで積み重ねてきたものを振り返り、不足する部分をどう補うか、というような進み方であったかと思っています。学校教育で使える時間は限られています。新しいことを始めると、その分何かを削らなければなりません。「対話的な学び」を実践しようとするれば、どうしても「個別の思索的」な時間は削られていきます。多分、身に付く技能の質も異なることになるのだろうと思っています。その功罪についてはしっかりと検証していくことが大事だと思います。

しばらく前から、大学の講義において、分かりやすく工夫された板書が求められるようになりました。学生の授業評価アンケートの項目にもなっていましたので、しばらくは板書に気を遣うようにしましたが、それはどうもよくなさそうだとすることに気付いたので、最近では、最初の講義で、基本的には黒板は使いませんと宣言することにしています。丁寧な板書は、耳で話を聞くより、黒板を映すことに集中してしまうのです。黒板を写すことで、理解できたと錯覚してしまうことが多いのです。さらに、話を聞いて要点をまとめるといった能力が、明らかに不足した学生が目立ちます。きれいな板書というのは、一見よさそうに感じられますが、大学の講義においては、あまりよく機能していないように思われます。

この実践報告集は、最先端の教育の話題が表に出ているわけではありませんが、延々と積み重ねられてきた今までの教育活動をしっかりと踏みしめ、更にその先を目指しています。我々の日常的な教育活動の、最先端であるものと自負します。様々なところで活用していただければ幸いです。

皆様には、この実践報告集への御批正とともに、今後とも本校の研究活動につき、厳しい御指導と温かい御支援をいただきますようお願い申し上げます。